

【電子かわら版 チャペル・アワー No.012】 2020年7月7日(火)

★今週の前奏：SLANE-Be Thou My Vision, arranged by Oean Magraw (「讃美歌 21」 531 番)

<https://www.youtube.com/watch?v=HNtaEbr8BmY> (ハンドベルの演奏で)

★今週の聖書：ヨハネによる福音書 6章 16-21 節

★今週の賛美歌：531 番「主イエスこそわが望み」(アイルランド民謡に相応しい楽器での演奏で)

<https://www.youtube.com/watch?v=sMsEDVm-cT0>

★今週のアート：「ガリラヤ湖上の嵐」(1633 年作)by Rembrandt van Rijn (1606 - 1669)

https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Rembrandt_Christ_in_the_Storm_on_the_Lake_of_Galilee.jpg

★今週の後奏：RANDOLPH (by Ralph Vaughan Williams) - (「讃美歌 21」 541 番)

ロンドン、カナダ、ニューヨークの救世軍合同ブラスバンドの演奏。

<https://www.youtube.com/watch?v=DmjY5TsBOJg>

★ メッセージ：「嵐の湖上で」

私たちの学校、新島学園短期大学は、上毛カルタの「へ＝平和の使ひ 新島襄」の読み札で知られる新島襄の名を戴いた学校です。新島は、日本近代初期にキリスト教の宣教師としてアメリカから帰国し、「近代」という新たな時代を担う若い世代の人たちがキリスト教の「信じる気持ち」に根差した自主自立の精神を体得し、その自由な発想で、それぞれに与えられた「良心」＝神の「み心」を求める志＝に従って、「仁政の行き届いた」＝人道的な社会を創り出す**人物(人材、ではなくて)**となることを願って、その学びと練達の間としての私立の総合大学の設立という志に



命を捧げた人物でした。京都に設立され、今年創立 145 周年を迎える同志社は、彼がその後半生を捧げて礎石を据えた、私立(＝市民の献金と祈りによって立つ)の、総合的な(幼稚園から大学院まで)学びの間へと成長しました。

私たちの新島学園は、この新島の「ルーツ」となる上州で、いち早く新島の仲間となり、自分たちもまた同じように教育の業を通して、キリスト教の「信じる気持ち」を知り、神と隣人(＝社会)に仕える人物を育てる、という使命を担おうとした人たちの、「自分たちの歩みが新島の働きに倣うように」との祈りを、その名前に負っています。新島の帰国直後に直接、新島からキリスト教の教えを聴き、学校設立への熱い志に触れて自らもキリスト者となり、新島の大学設立運動を支えた人たちが世代を超えて受け継いだ、「良心をその手腕に運用する」若者を教え育もうという志が、私たちの学校の名に刻まれているのです。

私たちの学校はですから、「新島の精神」を今日に受け継ぎ、それぞれの生き方の中で新島の生涯の歩みに倣う「志」を持つ人物となることを、学生の皆さんに望んでいる、といってもいいかと思えます。具体的な職種や職業は、一人一人が与えられた特性によって違って、一人一人が「志」によって歩み、生きる人物であるよう願っている、ということです。しかしそうすると、その「志」の根っことなる「新島の精神」とは一体どんなものか、という問いが生まれます。この問いへの答えは多様な側面からの「答え」があると考えます。そこで今日は、聖書の物語との対話のために、新島が「航海する人」であった、という側面に注目して考えてみたいと思います。

新島は 1843 年に江戸は神田の安中藩江戸藩邸で生まれました。10 歳の時に、ペリー来航の大衝撃を身近に体験し、日本は海に囲まれた小さい国で、その海の向こうには広い「文明化された世界」があることを身に染みて知るような環境で育ちます。彼は知識欲と好奇心に溢れて勉学に打ち込む「インドア派」の青年、と見られがちですが、彼の内心には、例えば漢訳の「ロビンソン・クルーソー物語」に心躍らせるような冒険心もありました。その新島が、17 歳から足かけ 3 年間、嬉々として通い学んだ「学校」がありました。築地にあった、幕府の「軍艦操練所」(海

軍士官学校、と思えばよいか) でした。新島はそこで、西洋の最新の科学技術を学びました。蒸気エンジンと帆と両方を備えた軍艦を操縦する法、海の上で船の航路を確かめるために必要な技術や、波で揺れる船から大砲を打って標的に正確に当てるような砲術などですが、それらは最新の数学、幾何学、物理学など、新島が得意とした自然科学系の学びの集成でした。

新島が軍艦操練所で学び始めて3年目の始め、新島は遂に、帆船を操って実践航海に出ることになります。江戸・倉敷間を2か月半ほどかけて往復する航海でした。その航海が新島に、「船に乗って海を渡り、広い世界で、もっともっと日本の新たな時代のために学ぶ」という志を植え付けました。その数か月後、彼は函館から幕府の法度を破って密航・脱国し、東シナ海から喜望峰を回って大西洋を渡る、という1年の航海を経て、アメリカ・ボストンへと向かいました。命がけの大冒険でした。江戸・倉敷間の航海でも、また江戸から函館への航路でも、そしてボストンへと向かう航海でも、沢山の「嵐」が新島を襲います。海の上で、彼の乗った船を襲う嵐にも遭遇しましたし、彼の人生、彼の内面に巻き起こった激しい怒りや困惑、迷いの嵐にも遭遇しています(詳しいことは授業「新島襄」にて・・・)。

このような経験を背景に、大学設立運動に邁進する新島は、その演説の中で、大学設立のための支援者と募金を集める運動を、「嵐の海に航海にできるようなもの」と言ったことがあります。しかし、「どんなに嵐が激しくても、一旦洋上に出たからには、目指す港に着くまで引き返すわけにはいかない」と言いました。そして、この嵐のただ中の航路も、やがて目指す港に導かれることを信じて疑わないと言ったのです。

今日、皆さんと鑑賞している絵画は、レンブラントによる、嵐のガリラヤ湖を航海するイエスと弟子たち一行を描いたものです。船は、大嵐に木の葉のように揺れ、ガリラヤ湖で漁師をしていた弟子たちが必死で操船に追われる様子がハイライトを浴びています。そして、舵の辺りの暗がり、船酔いで苦しみ、船のことは何もわからず戸惑いしがみつくだけの弟子に囲まれ、イエスの姿があります。ヨハネの物語を映したものではありませんが、どの福音書にも、嵐に揺れる船にイエスも共にいて、船を救う物語があります。文脈やあらすじが少々異なっても、どの物語も、弟子たちが、今にも沈みそうな自分たちの船に、イエスがいてくださること、そのことだけが、自分たちの命のよりどころであることを受け容れた時、「嵐は静まった」と、奇跡の物語を結ぶところでしょう。

ヨハネ福音書のこの箇所でも、嵐で翻弄される船には、はじめ、弟子たちだけが乗り合わせています。しかし、この危険な状態の船の上へ、荒れ狂う嵐を衝いて、イエスは乗り込んでこられたのです。嵐を衝いて、死の危険に晒される自分たちのところへ、共にいる、そのためだけに来てくださったイエスを弟子たちが船に迎え入れた時、「嵐は静まった」のでした。

新島も、人生の「航海」の至る所で、嵐のガリラヤ湖の弟子たちのような経験をしたのです。しかしどの時にも、沈まんばかりの新島の船の上に、イエスも共に乗っておられることを受け容れた時、新島には、嵐の海を、目指す港へと舵を取り続ける勇気と希望が与えられたことでしょう。嵐を乗り切るのは、自分の力ではない、自分と一緒に、この危険のただ中に乗り合わせておられるイエスの故だと、新島は知っていたのでしょ。神のみ心を求める新島の「良心」の、一つの現れ、だと言ってよいでしょう。

それぞれの具体的な「嵐」は違って、今、正に、嵐の湖上の小舟の中にいるようだ、と感じる私たちです。この船の上に、私たちも、荒れ狂う嵐を衝いてここに来てくださるイエスの存在を受け容れ、絶望ではなく、希望と勇気を選ぶ、「良心」=新島の精神を持ちたいものです。

【祈り】嵐に翻弄される小舟に乗り合わせる私たちと、恐怖も不安も共にしてくださる方がおられることを、忘れることがありませんように。私の力でなく、その方の存在故に、目指す港に迎えられることを知ることが出来ますように。アーメン。

*****：解説

★今週の前奏：SLANE-Be Thou My Vision, arranged by Oean Magraw (「讃美歌 21」 531 番)

★今週の賛美歌：531 番「主イエスこそわが望み」

前奏は、アイルランド民謡を起源とする賛美歌を、ハンドベルのためにアレンジした演奏を選んだ。ハンドベルも、教会の礼拝のために生み出された楽器。教会の塔に音色の違う鐘を沢山しつらえて複雑な曲を演奏するようになった時代に、それを人間によって打ち鳴らす楽器として発展。新島学園中高には素敵なハンドベル・クワイヤーがありますが、なかなか演奏を耳にする機会に恵まれないので。

賛美歌の「奏楽」は、アイルランド民謡を起源とするの原風景を感じさせる演奏を選んだ。フルート、ギター、フィドル（ヴァイオリン）、バグパイプのアンサンブルで。

賛美歌の歌詞については、アイルランドの修道院で 8 世紀初頭に作詞されたものと考えられています。それが 19 世紀になって、イギリス文学者・メアリー・E・バーンが英語に翻案し、更にそれをアイルランド出身の作家、エレナー・H・ハルが曲に乗せて歌えるように韻文化したものです。Be Thou My Vision とは、「主よ、私の目指すべき姿となってください」と言った意味。是非、531 番の歌詞もよく味わって。

★今週のアート：「ガリラヤ湖上の嵐」(1633 年作)by Rembrandt van Rijn (1606 – 1669)

カンヴァスに油彩。嵐に揺れる船の上、12 人の弟子とイエスの姿があります。メッセージの中で語ったように私は感じています。特に、イエスにではなく、明るい光＝ハイライトが必死に船の帆を操る弟子たちに当たっていることに注目しています。この人たちになぜ、光が当たっているのか。ひょっとして、彼等の上に、今、希望の光がさしているのではないか。その光は暗がり静かに座るイエスへの信頼からか、その存在に勇気を得ているからか。皆さんはどう感じるでしょう。

★今週の後奏：RANDOLPH (by Ralph Vaughan Williams) – (「讃美歌 21」 541 番)

ロンドン、カナダ、ニューヨークの救世軍合同ブラスバンドの演奏。

救世軍はイギリス生まれの、プロテスタントのキリスト教のひとつ。社会的な活動に関心をもつ教会で、町の貧しいひとたち、不利益を被っている人たちのために奉仕する、ということについて熱心です。救世軍の大きな特徴は、ブラスバンドによる演奏を、宣教活動の大きな活動として位置付けているところでしょう。先週もブラスバンドの演奏を後奏に選びましたが、今日のは一層豪華です。

高崎の「昭和レトロアベニュー」という古いアーケード商店街の真ん中にも救世軍の教会があり、日曜の礼拝前には教会の前でブラスアンサンブルで礼拝への招きのための演奏をしておられます。

541 番は、実は同じ英語原歌詞で二つの賛美歌が「讃美歌 21」に収録されています。God be with you till we meet again の原歌詞初行で索引を引くと、もう一つも見つかりますね (465) ?

歌詞はアメリカ東海岸で牧師として生涯を終えた、ジェレマイヤ・E・ランキンによって書かれています。ランキンは、新島と同じアンドーヴァー神学校で学んでいます！

God be with you till we meet again は英語の「Good-Bye さようなら」の語源になっている言葉で、ランキンはその言葉を繰り返し織り込んだ、集会からそれぞれの場所へと派遣されていく時に歌う賛美歌としてこの詩を書いています。賛美歌の歌詞も併せて味わってください。

作曲者、レイエフ・ヴォーン・ウィリアムス。イギリスの近代教会内外の音楽作家として、重要な作家です。曲名 RANDOLPH はウィリアムスのかわいがっていた従弟の愛唱だと言われています。ウィリアムス作曲の賛美歌は他に 183 番もあります。いつも、ちょっと不思議な和声です。